別冊

史の杜

FUMI NO MORI

東北大学

No.9

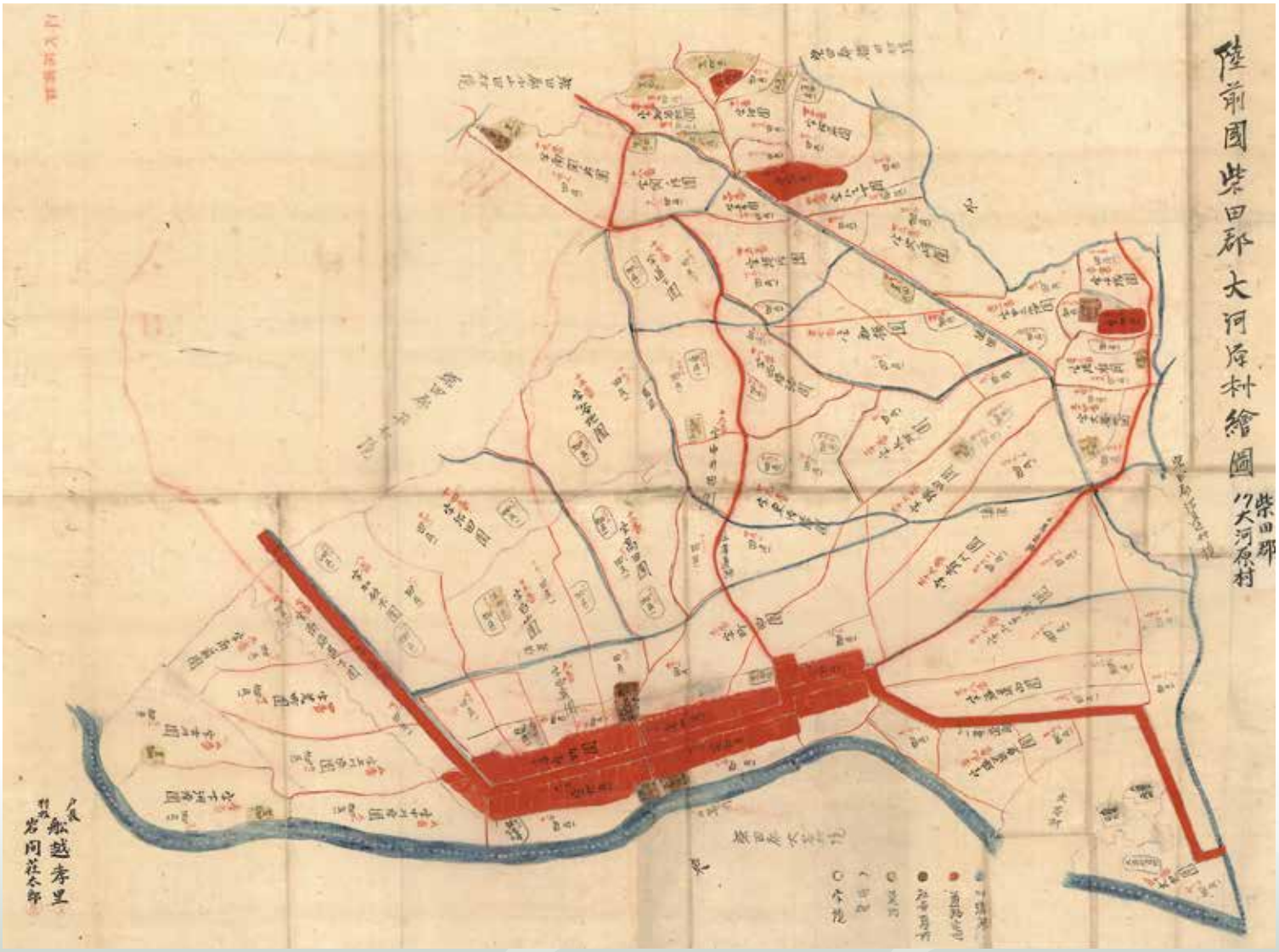
地域の歴史を知る

佐藤屋の歴史資料

U-history
CNEAS, Tohoku University

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門（U-history）

発行日／2023年10月13日
編集・発行／東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門
〒980-8576仙台市青葉区川内41
TEL/FAX 022－795－3140
URL：https://uehiro-tohoku.net/
デザイン・印刷／株式会社東誠社



陸前国柴田郡大河原村絵図　明治時代　宮城県公文書館所蔵

佐藤屋初代の権右衛門が大河原へやってきたのは、安永年間（1772～81）といわれています。最初は奉公人として移り住んだあと、独立して呉服商を営みました。独立した際は奉公先の屋号・須藤屋を使いましたが、のちに「佐藤屋」、屋印（商号）を出身（出羽国米沢藩）にちなんで〈ヤマ米〉となり、代々継承されています。

このように、佐藤屋は江戸時代後期から有数の商家が立ち並ぶ大河原で活躍したと考えられますが、現在までに伝わる資料は明治時代以降のものが中心です。その資料は大きく２つの文書群（佐藤源之家文書・大河原町佐藤家文書〈東北歴史博物館〉）に分けられますが、もともとは同じ家に保存されていたもので、それぞれを重ね合わせることで「新発見」ができると期待しています。

ヤマコメ醤油のラベル　近代
東北歴史博物館佐藤家文書 716

◆佐藤源之家文書

東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門で調査を進めている文書群で、およそ500点を含んでいます（現在調査継続中）。判明する年代は寛文10年（1670）から昭和8年（1933）にかけてのものですが、江戸時代作成のものは書籍類が中心です。明治10年（1877）ごろから、佐藤屋の経営に関する「日記」「日誌」が少しずつ増えはじめ、味噌・醤油・呉服・農業・土地利用といった仕事についても情報が明らかになります。

◆大河原町佐藤家文書（東北歴史博物館）

東北歴史博物館の調査による文書群で、およそ1900点が含まれています。判明する年代は明治19年（1886）から昭和22年（1947）で、近代の経営関連資料が中心です。加えて、この時期は五代目源三郎が議員などの公職を務めていたこともあり、大河原および周辺地域との社会的関係もわかるようになります。特筆すべきは、大隈重信・西園寺公望・原敬・後藤新平など、中央政界の重鎮たちとの接点を示す書簡が残されていることです。

四代目源三郎から五代目源三郎へ

激動の幕末期から明治時代前半に、佐藤屋の経営を切り盛りしたのは四代目源三郎でした。四代目は、文政2年（1819）正月28日に三代目三之助の長男として生まれ、明治22年（1889）7月26日（享年61歳）で亡くなっています。人物評には、「豪傑肌の人」で「酒を愛し」、近隣の人々を集めては「酒宴徹宵」におよぶなど豪放磊落だったようですが、味噌・醤油の醸造および販売、さらに呉服商などについて「商略縦横」の敏腕経営者でした。家業で得た潤沢な資金をもって積極的な土地取得にも努めています。ただし、政治とは距離を置き、こちらは深治郎（のち五代目源三郎）に一任したと伝えられます。

この後継者となった深治郎は、佐藤屋の奉公人たちと一緒に農作業をしたり、夜学に出かけて勉強を重ねるなど、快活な少年時代を過ごしたようです。四代目の死去にともない、明治22年8月14日、

深治郎は宮城県知事宛に改名願を提出しました（東北歴史博物館佐藤家文書1310）。これによれば、①佐藤屋は源三郎の名義で商業を続けてきたこと、②実父源三郎（四代目）が亡くなり、私の名義（深治郎）で取引をすると商売に大きな支障が出ること、③襲名して自身を源三郎と改名したい、との文書でした。申請を受けて宮城県は、同月31日に許可の通知を出しています。

改名願

柴田郡大河原町
大河原五十八番地
平民
佐藤深治郎
嘉永四年六月三日生

私義、祖先来代々源三郎之名義ヲ以テ商業相営居候処、実父源三郎義、本年七月二十六日死去致候ニ付、新タニ私名義ヲ以取引致候テハ通信上、甚タ不便ヲ来タシ商業上、百般差支有之候ニ付、今般亡父之名義ヲ襲ヒ源三郎ト改名致度候間、御聞届被下度、別紙戸籍写相添此段奉願上候也

明治二十二年八月十四日　右
佐藤深治郎

宮城県知事　松平正直殿

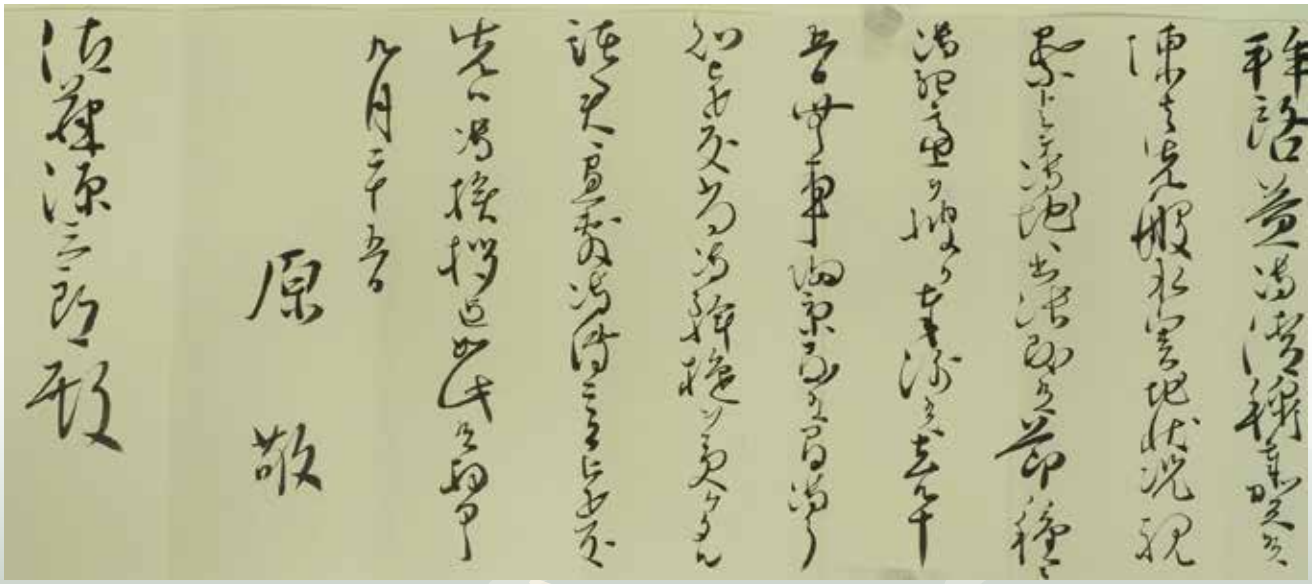
明治22年8月14日　佐藤深治郎提出の改名願

中央政界とのつながり―原敬と後藤新平からの書簡―

大河原の地域行政および経済をリードしていた五代目源三郎は、宮城県内にとどまらず、中央政界の重要人物とも交流をもっていました。ここでは、原敬（はら・たかし、1856生～1921没、第19代内閣総理大臣）と後藤新平（ごとう・しんぺい、1857生～1929没、内務大臣・外務大臣などを歴任）から源三郎に送られた書簡をご紹介します。

◆原敬書簡

※翻刻文は次のページにあります。



佐藤源三郎（五代目）宛原敬書簡　（年不詳）9月25日　東北歴史博物館佐藤家文書1113

【東北歴史博物館　佐藤家文書1113】

拝啓　益々御清穆奉賀候、
陳は先般水害地状況視
察トシテ御地へ出張致候節、種々
御配慮ヲ披リ奉謝候、去ル十
五日無事帰京致候間御了
知被下度、尚御斡旋ヲ受ケタル
諸君へ宜敷御伝言被下度、
先ハ御挨拶迄如此候　拝具

九月二十五日

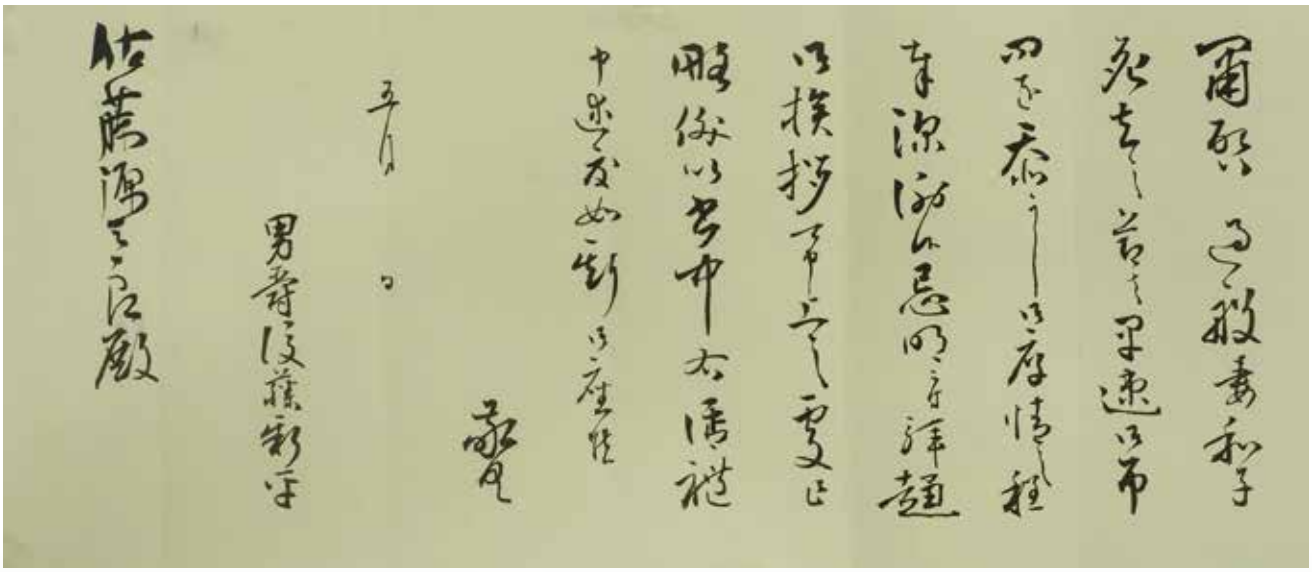
原　敬

佐藤源三郎殿

佐藤源三郎（五代目）宛原敬書簡翻刻

原は水害地状況視察のため大河原を訪問し、その際源三郎に世話になった御礼を述べ、9月15日に無事東京へ戻ったこと、そして源三郎とともに大河原で出会った「諸君」へよろしく伝えてほしいと書いています。

◆後藤新平書簡



佐藤源三郎（五代目）宛後藤新平書簡　（大正7・1918年）五月　東北歴史博物館佐藤家文書1116

男爵と冠した後藤新平の署名があるこの書簡は、年代が書かれていませんが、妻和子死去の際に源三郎が弔意を示したことへの返礼です。後藤和子（1856生～1918没）は大正7年に53歳で亡くなっていることから、この書簡も同年だと推定できます。後藤から源三郎への手紙はほかにも残っており、また交流も深かったことが予想できます。